

人間山岸外史

池内 規行 著



山岸外史って誰？ そんな

な声か聞てきそつた。

太宰治の親友で、その疎遠

になり、太宰ヒキのフツ

ンや批評家や研究者には毛

嫌(あるいは無視忘却)

ざれている人物。こんなと

ころが公約的などころ

か。

しかし世の中には奇特

な人がいる。そんな山岸の

作品と人柄にほれ込み、緻

密で懇切な評伝を書きあげ

たのが、この本の著者、池

内規行である。彼の方法は

きわめて正道的だ。残れ
た著作、評論をそのままと誑
むこと、家族・友人・知
人からの話を聞き出すこと
である。これ以外に、故人と
なった交遊者を知る方法は
ない。本書が第一部「評伝」
第二部「山岸外史」をめぐ
る人びとの一部構成となつ
ているゆゑである。

著者は、周囲の人たちが

ら丹念に伝記的事実や作品

の成り立ちを聞き、「人と

作品」について評伝(第一

部)を書きあげた。第二部

は、いわばそれを取り立て

る著者の取材記録ノートの

ような趣きもあって、奇矯

で無頓着な行動を取りなが

ら、愛される酔っぱらいと

して周囲の人に慕われた文

学者の本当の姿を描つて

した。

もちろん「日本浪曼派」

と共産党との両翼に所属し

たこの文学者の矛盾した

怪奇・複雑な性格が、簡單

に描き切れるわけはない。

ロマンチストにしてリアリ

スト。そして、その振れ幅

が大きかった分だけ、文学

者として不遇であつたとい

つてもよい山岸。その周辺

にいた人々も、それに近い

運命をたどつていったこと

が、たまたまとした筆致の

裏から読み取れるのであ

る。

作中で示される書量の比

不遇の文学者の生涯に光

喩が巧みである。太宰と山

岸は、二つの書量が多すぎ

た。その接近と交差と隔たり。

しかも、二つとも長く輝く

尾を引いた、美しい流星群

にはかならない。(佐藤春

夫と妻子たちのような悪屋

と衝星の関係ではなく)一

方が不当に忘れられてい

る、その公憤が、この本を

端正ながら、熱気のある書

物としている。

▽評者＝川村湊・文芸評

論家

(水声社・4200円)